

島津家の戦争(3)

米窪明美

集英社インターナショナル ウェブ立ち読み



## 第五章 日本最強の部隊

久静の死から五年後の慶応三（一八六七）年十一月七日、大坂土佐堀の船着場に薩摩藩士たちの一団が到着した。

そのなかに、若者ばかりで構成された、ひときわ威勢のよい小隊があった。都城島津家家臣団である。彼らはこの年の七月に藩の命を受けて都城で新たに編成された部隊で、総勢百二十一名の大半を十代後半から二十代の若者が占めていた。

大坂で彼らを出迎えたのは、辻々に満ちる「ええじゃないか」の掛け声だった。

ええじゃないかはお札降りをきっかけに民衆が集まり踊るといふ騒動で、夏ごろから全国的に広まっていた。たいていの場合まず神社のお札が降り、その後お札降りがあった家では施行せりぎを行ない、近隣の人々が押し掛け、祭りのように踊り明かすという段取りであった。

囃子はやしに合わせて町を練り歩く人々をよくよく眺めると、男は女装を女は男装をしている。情報収集のために大坂入りしていた駐日イギリス外交部の通訳生アーネスト・サトウも、この光景に

出くわしたという。

「家という家は色とりどりの餅、みかん、小さな袋、菓<sup>わ</sup>、花などで飾られている。着物はたいいて赤いちりめんだが、なかには青や紫のものもある」(萩原延壽「遠い崖」六)

夜遊びに出たサトウらがお目当ての店に着くと、主な部屋はみな踊りの集団に占拠されていた。私たちが立ったまま、部屋の交渉をしているところへ、踊り狂った若者連中や子供たちの一団が、とても華美な衣裳の丸々とした人形をのせた轎<sup>かこ</sup>をまん中にかついで、あちらこちらに揺り立てながら、ぞろぞろと入ってきた。その家にいた宴会のお客はみな、(中略)家の部屋部屋を仕切る襖<sup>ふすま</sup>の敷居のところへ迎いに出てきた。そして、居合わせた者が一緒に踊り狂ったのち、イイジャンイカの一団は再び姿を消した」(「一外交官の見た明治維新」)

凍てつく空の下、頭に提灯をかざし夢中で乱舞する人々は、まるで燃え盛る松明<sup>たまた</sup>から飛び散った火の粉のようだ。小さな集団同士が街角で合流し、踊りの列は次第に長くなる。

「ええじゃないか! ええじゃないか!」

「ええじゃないか! ええじゃないか!」

社会の地殻変動により溢れだした民衆のエネルギーが、大坂の夜空を赤く染めていた。

この年の五月、幕府が兵庫開港に踏み切ると、薩摩藩上層部は討幕へと舵を切った。

今までの本書の流れからすると、本来は「国際派」であるべき薩摩藩上層部がなぜ兵庫開港に反対し、それを口実に討幕へと進むのか、その理由が分かりづらい。

黒船以前から貿易に積極的な薩摩藩からすれば、兵庫開港はむしろよろこばしいことなのではないだろうか。同じような疑問を抱いたアーネスト・サトウの問いに、西郷隆盛が明快に答えている。

〔西郷〕 わたしの主君は、兵庫開港そのものには反対ではありませんが、兵庫を他の条約港とおなじやりかたで開港することには反対です。つまり、われわれは、兵庫が日本全体の利益となるような仕方を開港されることを望んでいるのであって、たんに幕府の私利をこやすために兵庫が開港されることを望んではないのです。

サトウ という、あなたがたは、どういう方法で兵庫を開港しようというのですか。

西郷 兵庫開港に関連する一切の事項を、五名ないし六名の大名からなる委員会の手にゆだねることによつてです。そうすれば、この委員会は、幕府が利益を独占するために勝手に行動するのを防ぐことができるでしょう〔遠い崖〕四

最も重要なのは次の点だろう。

〔西郷〕 兵庫は、われわれにとつて、きわめて重要な港です。われわれはみな大坂の商人に金を借りています。それを返済するために、われわれは毎年藩の物産を大坂の商人に送りどけなければなりません。もしも兵庫が横浜とおなじ仕方を開港されるならば、われわれの財政は大混乱をきたすでしょう。

サトウ なぜあなたがたが兵庫をそれほど重視するのか、よくわかりました。兵庫問題は、あなたがたの最後の拠点なのですな〔同上〕

確かに兵庫港は彼らの最後の砦だった。

すでに幕府は西洋諸国と通商条約を結び、横浜をはじめとする諸港を順次開いていた。この結果、外国船は琉球を素通りして、本土の港へ直接向かうため、鎖国政策を逆手にとって貿易を柱の一つにしてきた薩摩藩の財政は大きな打撃を受けた。そのうえ、背後に金融都市・大坂を控えた兵庫港までもが幕府の管理下に置かれ、そこから生み出される利益を幕府が一元管理するとなれば、薩摩藩の経済は間違いなく破綻する。

だが、第十五代将軍・徳川慶喜は兵庫港を横浜と同様の方式で開港し、利益を独占する考えだった。

彼は諸外国に兵庫開港を宣言し、朝廷の承認を得るため着々と準備を進めてゆく。前年末に慶喜が將軍職に就くのと前後し孝明天皇が崩御する。まだ少年の明治天皇が玉座に即くと、頑なに攘夷にこだわった先帝の御代と異なり、宮廷から開港の承認を得る可能性は高くなっていた。

そもそも、慶喜と薩摩藩の関係は複雑だ。

久光の兄で名君の誉れ高い先代藩主・斉彬は、病弱な第十三代将軍家定の後継者に水戸徳川家の一橋慶喜を推し、その実現のために奔走していた。ところが、第十四代将軍には紀伊藩主だった家茂が就くことになり、慶喜を擁立していた斉彬自身も急逝する。この結果、安政の大獄の嵐が吹き荒れ、一橋派は肅清の憂き目に遭ってしまふ。

そんな彼らの復権に尽力したのが、斉彬の実弟である久光だった。

齊彬と久光とは薩摩島津家第二十八代当主の座を巡って、ともに担がれた過去がある。結果、当主は兄・齊彬となったわけだが、兄弟仲は不思議なほどに良好だった。齊彬は久光の堅実な人柄や学識を高く評価し、藩主となってからは何かと相談を持ちかけていた。一方の久光も多才で華やかな存在である兄を深く尊敬していた。二人はおたがいに分らないものを相手に見出して、支え合っていたという。

それゆえ齊彬没後、事実上の国主となった久光が打ち出した基本方針は齊彬路線の継承であった。彼は他の雄藩と語り、一橋派の復権に尽力する。

しかし、実際に慶喜が復権して幕政を握ると、たちまち彼らは失望を味わう。久光らは慶喜に對して、雄藩をも参加した形での新しい政治体制の構築を望んでいたが、慶喜が行なったのは揺らいだ幕府体制を再構築すること。そこに雄藩の出番はない。

このような経緯があったから、なおさら兵庫開港問題はおたがい絶対譲れない、政争の核心となったのである。

島津久光（薩摩）、松平春嶽（越前）、山内容堂（土佐）、伊達宗城（宇和島）は揃って上洛し、兵庫開港承認問題を先送りし、長州藩処分問題を解決すべきだとの建言をまとめた。

幕府は第一次長州征伐で恭順の意を示した同藩にとどめを刺そうと、第二次長州征伐を計画したが、反対に各地で長州軍に敗北し、先代將軍・家茂の死をきっかけに撤兵した状況になっていた。この長州の件を蒸し返すことにより、雄藩側は幕府の弱体化を天下にさらそうという作戦である。

だが、慶喜は四侯の建言を退け、宮廷に圧力をかけて兵庫開港の承認を得る。四侯側も力を尽くしたが、有栖川宮家出身の生母を持つ慶喜への宮廷側の信頼を覆すことはできなかった。慶喜との間に亀裂が入ったまま、久光らは京都を後にする。

後になって振り返ってみれば、まさにここが討幕への分岐点となった。

というのも、六月に入ると薩摩藩は討幕の検討に入り、九月に入り長州藩、安芸藩（広島）との間で出兵協定を結んだからである。

薩摩藩と過激な攘夷思想を唱えていた長州藩とは長年反目し合っていたが、四ヶ国連合艦隊の下関砲撃により攘夷が容易でないことを悟った長州藩が藩論を転換すると、土佐藩を脱藩した坂本龍馬、中岡慎太郎らの仲介で、薩長両藩は密約を結び同盟関係となっていた。

討幕挙兵計画は、(一)薩摩軍が三田尻へ向かう、(二)それを合図に長州軍と安芸軍も出発、(三)三藩が大坂に到着するや在京の薩摩・安芸軍が御所を抑え「一挙奪玉（一気に『玉』＝天皇を奪い）」、(四)二条城、大坂城を抑え込む、というもので決行は九月末ときまった。

複雑な政治情勢ゆえに前置きが長くなったが、本章の冒頭に登場した都城隊は、このような流れを受けて結成された。

言うまでもなく、この都城隊結成の目的は倒幕にある。

武士の王国・都城はかねてより長崎で三、四千挺のミニエー銃を買い込み、藩内でも最新鋭の装備を整え、来るべき日に備えていた。



それゆえ藩から出兵要請が下ると、日頃の成果を試す機会がよいよ到来したと上を下への大騒動になった。前回の上京は久静や朝廷の護衛役であり、しかも久静が客死するというアクシデントもあったが、今回の上京はよいよ都城島津家の本領発揮になるに違いない。彼らは千人規模で出陣する心づもりであった。

ところが、他の地域との釣り合いを考えた藩から一小隊に制限され、幹部たちは頭を抱えてしまう。折角の機会を目の前に、涙をのんだ志願者も多かつたという。

そんな騒動もあったが、七月六日、都城隊の隊士たちは鹿児島へ向け出発する。

彼らは紺色木綿製の筒袖野羽織つっそのはおりと、同じく紺色木綿製のパッチの組み合わせに身を固めていた。これらは都城島津家から支給されたもので、精一杯西洋式を取り入れた当時としては最新式の品々だった。他にも彼らには西洋式銃、制服の着替え、合羽かっぱ（雨具）、与力提灯、ワッパ（弁当箱）、水筒などが支給されている。

我々は日本一強い部隊である。

冗談ではなく、彼らは本気でそう考えていた。藩主催の実弾訓練が行なわれた際、彼らの腕前は鹿児島城下でも評判を呼び、藩主・忠義から特別お褒めの言葉があつたほどだ。日本一強い武士の揃った薩摩藩の中でも特別なことから、つまり我々は日本のなかで一番強いのだ、というのが彼らの言い分だった。以後、彼らの動きを、籠谷真智子著『都城と戊辰戦争』、『都城市史』などを参考に追ってゆこう。

明日にも出陣する勢いで鹿児島に乗り込んだ都城隊であつたが、藩からの出撃命令は一向に下

らず、そのまま彼らは秋までとどめ置かれることになった。久光や忠義が推し進めようとした討幕拳兵計画に、藩内から異論が噴出したのだ。主な要因は財政難だった。

されど、長州藩、安芸藩との約束もある。困った薩摩藩上層部は一足先に外城や私領の藩士たちを中心とした部隊を出発させることにした。これならば財政問題もとりあえず回避できる。都城隊もここに組み込まれることになった。

十月三日、三隻の蒸気船が鹿兒島を出港。

兵員の数は史料によって異なるが、本書では一千人程度としておこう。船の中に、都城隊の面々の雄姿が見られたことはいうまでもない。

十月八日、薩摩部隊は長州藩三田尻に到着。

ところがここから先がまた長かった。一行は中之関に移動させられ、二週間ほど艦内に過ごす羽目に陥る。薩摩藩本隊の出発の遅れから、拳兵計画全体を見直す必要が出てきたからだ。都城隊はぼんやりと一日中海ばかりを眺めて過ごしていた。

十月二十三日、西郷隆盛、大久保利通、小松帯刀らが艦内に姿を見せる。

大政奉還という大ニュースを知らされ、艦内は大いにどよめく。この時、西郷らは討幕の密勅も携えていたが、そのことを知らされた者は限られていた。

続いて西郷らから一同へ命令が下された。都城隊らの乗船していた三隻の蒸気船は鹿兒島へとんぼ返りして、藩主・忠義をはじめ残りの部隊を乗せて上京する。ついては艦内の者は全員下船

し、長州藩の船を借りて大坂へ先行するように、と。

こうして、都城隊のほとんどの者は何が何だか分からないうちに蒸気船を下ろされ、長州藩が用意してくれた早船に詰め込まれ、冒頭で述べたように大坂に到着した。その後、彼らは別部隊とともに西本願寺別院に駐屯し、周辺地域の警邏けいゑ任務に就く。

十一月二十三日、藩主・忠義が兵を率いて京都薩摩藩邸に到着。

忠義が率いた兵員の数も史料によつて異なり、千人から三千人の幅がある。薩摩藩と呼吸を合わせるように長州藩、安芸藩の兵も続々と上京し、あとは討幕を実行するまでとなった。

十二月九日、王政復古の大号令を発する。

激動する幕末日本、その渦中にあつて都城隊の活躍ぶりはいかばかりといえ、さにあらず。

王政復古の翌日、十二月十日に彼らは本隊に編入され、西本願寺別院から伏見屯所（下板橋西詰堺町）へ移動し、そこで相変わらず淡々と周辺地域の警邏にあたつていた。驚いたことにサトウの日記によれば、大坂の街角にはいまだに「ええじゃないか」の掛け声が響き渡つていたといふ。

（祭りが続いているので、町という町は夜になつても煌々こうこうと明るく、ひとびとはまだ踊りくるつている。しかし、もう祭りにはうんざりだ）（『遠い崖』六）

サトウ同様に都城隊の隊士も、夜毎に流れるお囃子の音が嫌気が差していた。時折彼らはこの祭りが永遠に続き、近所の警邏と軍事演習を繰り返す自分たちの生活もまた永遠に終わらないのではと不安に駆られた。

だが、どんな祭りにもかならず終わりは訪れる。

十二月十二日、慶喜が二条城から大坂城へ退却した。ついに幕府は京都から撤退することになったのだ。

この事態の急激な変化を受けて、伏見の警備を担当していた都城隊に大きな災難が降りかかる。あの新撰組が京都を引き上げ、伏見奉行所を拠点に周辺地域の守護に乗り出したのだ。

改めて説明するまでもないが、新撰組は幕府によって集められた浪士組を基にする組織で、隊員には武芸に秀でた者たちが採用されていた。その後、京都守護職・松平容保（会津藩主）御預かりとなり、名称を浪士隊から新撰組と改め、京都守護や反幕府勢力の制圧にあたった。

もともと寄せ集め集団であった彼らは厳しい内部規律を課しており、違反した者は誰であろうと肅清された。中核メンバーであった伊東甲子太郎（ねたろう）も討幕派と気脈を通じたとして、脱隊したのちに暗殺されている。新撰組は伊東の背後で薩摩藩が糸を引いたとみて、それ以後、深い恨みを抱いていた。そんな新撰組と同じ縄張りで仕事をするというのだから、なんとも厄介なことになったものだ。

ただでさえ忙しい都城隊に、さらなる仕事加わる。

都城隊は半数ずつ左、右二班に分けられ、本来の任務の他に、京都九条の東寺（とうじ）におかれた本営役所警衛にも駆り出されることになった。本営勤務の際には朝五時に東寺に到着し、夕方伏見の屯所へ戻るといふ強行軍だ。

なぜこのような仕事がまわってきたかといえ、都城隊が京都の町に慣れているためだ。これまでも薩摩藩士は城下土を中心に、久光とともに何度か上京していたが、藩邸などで過ごすことが多く京都の町の一部しか知らない。まして外城や私領の武士たちに至っては、初めて上京したという者がほとんどだ。そのなかで、京都警備の経験のある都城隊の存在は貴重だった。

そのうえ都城隊は、鳥羽街道方面と宇治方面の警邏も担当することになった。能力のある人もとへ仕事が集まるのは世の常、それにしても分量が多い。

しかし彼らは喜んで新たな任務も抱え込んでしまう。

都城隊はまだ暗いうちから起き出し、紺色木綿の上着とパッチを着こみ、防寒用に同じく紺色木綿の袴野羽織（わぢ）をはおり、刀吊（たなつり）の白木綿帯を腰のあたりでびしっと決めた。帯は前結びにして端はそのままたらし、左肩には背負袋をかけ、頭の上から頭巾をかぶる。

動きやすく作られた軍装は京都の冬にはやや薄着で、南国育ちの薩摩藩士たちの中には身を縮めている者もあったが、都城隊は平気だった。霧深い都城盆地の気候は京都のそれとよく似ている。冬になると霜柱が大地を押し上げ、人々はザクザクと音を立てながら道を行き交うのだ。

身支度のなかで一番肝心なのは目印である。

薩摩藩は全員に肩章または腕章を配布したが、真似されて悪用される恐れがあるため、その他にも目印になるものを身につけ、それをたびたび変更していた。

都城隊が当初用いていたのは白湯手つまり手拭いで、ある時は鉢巻風に頭に後ろ結びをし、またある時は肩や腕に結ぶなどさまざまな工夫をこらしている。隊員同士左右を見回し本日の目印

を確認すると、お互いの無事を祈りつつ各々の仕事場へと散っていった。

ところで、薩摩藩は幕末になって軍制を改めて制服を定めていたが、多くの藩では軍服が統一されておらず、また浪人や農民から兵を募ることもあったので、同じ藩内でも同士討ちが起きるのはしょっちゅうだった。同じ藩でもそうなのだから、遠目に他藩の武士を見て、どこの藩の者か見分けるのは至難のわざ。

都城島津家の記録を見ても、伏見警備がなかなか簡単ではなかったことが知られる。それによれば、不審者に出会った場合の対応として、(一)「どこの藩の者か」と問い「長州藩だ」と言われたので通した、(二)加賀藩の紋章をつけていたので、よく分からないけれども多分加賀藩だと思つて通した、などの例が報告されている。

これでは相手方に騙す気があれば、言い繕つくろって簡単に検問をすり抜けることができる。一触即発の緊急事態かと思いきや、予想に反してのんびりとした雰囲気いきが漂っている。革命とは勇ましくいように聞こえるが、案外、現場はこんなものなのかもしれない。

実際、敵対する新撰組とも激しい争いは起こらず、近所の風呂屋で鉢合わせすることもしばしばだったが、おたがいすんなりやり過すぎしていった。むしろ新撰組にとっては内輪もめのほうが問題であった。都城隊の記録でも、局長・近藤勇いづみが発砲を受けて暗殺されそうになった現場の目撃談が残されている。それによれば近藤は「あつ」と声を上げ鞍の前輪にうつぶせになり、役屋敷まで馬で駆け込んだとある。

十二月二十七日、都城隊の半隊が天皇臨席のもと行なわれた、共同軍事演習に参加している。

この日新政府は建春門外にて、薩摩、長州、土佐、安芸藩の部隊に演習を行なわせた。『明治天皇紀』によれば、まず土佐藩が約二十人ずつ二小隊で運動を行ない、次いで安芸藩が約二十人ずつ四小隊で運動を行ない、長州藩は約四百人で大隊運動を行なったという。

最後はいよいよ薩摩藩の番だ。やや頬を紅潮させた都城隊の隊士の顔も見える。揃いの服を着て整列した薩摩藩士たちは他藩の度肝を抜こうと、演技が始まる前からすでにわくわくしていた。一瞬の静けさののち、会場に大音量の西洋音楽が響き渡った。

イギリス式に兵制を改めた薩摩藩は、各小隊に大太鼓役、小太鼓役、喇叭役、笛手役など楽器を扱う役目を置き、大隊行進の際には各小隊の楽士が一つに集められ軍楽隊を構成し、先頭に立ち西洋の行進曲を演奏していた。

音楽のリズムに乗り、なんと千五百人もの兵士が隊列を組んで歩き出した。頭に丁髷ちやまげをのせて西洋の音楽を奏でている楽士や、それに合わせてやはり頭に丁髷をのせた藩士たちが、手足を振り大真面目に行進している姿を思い浮かべるとなんと面白。

勇壮な行進曲と、兵士たちが大地を踏みしめる足音が重なりあい、一つのメロディーを作りだす。御簾みすだ越しに会場を眺めていた明治天皇はそれを心地よく聞いた。

天皇はこの時、満十五歳、白い絹の着物に緋色の袴をつけ、頭には普段用の冠をかぶり、手には扇をにぎっている。顔には白粉おしろいを施し、頬紅、口紅を差し、剃った眉の上の方に眉を描きつけ、歯を鉄漿てつじょうで染めていた。伝統的な衣装に身を包んだ若き天皇は、この日から崩御の日まで彼の傍

らで絶えず鳴り響くことになる勇ましいリズムに耳を傾けた。

怒鳴りつけるような号令に従い、兵士たちの足音は右へ左へと動いてゆく。やがて兵士たちの足音がびたりと止まり、再び駆け出すと地鳴りがした。明治天皇の治世で初めての戦争が、あと数日で始まろうとしていた。

慶応四年一月二日、幕府軍は京都へ向けて進軍を開始した。

王政復古ののち、新政権内では慶喜の処遇を巡ってせめぎ合いが続き、状況は慶喜に有利に展開しつつあった。

もし彼が新政権内に復帰するようなことになれば、薩摩や長州は苦境に立たされてしまう。そんな時都合よく起こったのが、庄内藩による江戸薩摩藩邸焼討ち事件だ。

三田にあった薩摩藩の藩邸を、庄内藩が砲撃したこの事件は、浪人たちを使った薩摩藩の攪乱作戦に庄内藩がまんまと乗ってしまった結果だといわれている。だが、その一方で、幕府側の主戦論者たちが開戦の口実にされると承知のうえで、庄内藩もあえて攻撃したという説もある。

いずれが真相であれ、「薩摩藩邸焼討ち」の知らせを聞き、かねてより京都からの退却に内心不満を募らせていた幕臣たちの中から「薩摩討つべし」の声が沸き起こり、抑えきれない事態となった。

戦国武士の荒ぶる魂を幕末まで保ち続けた薩摩武士は例外として、平和な時代が続く間に他藩の藩士は牙を抜かれた獣のように大人しくなっていた。されど彼らもやはり武士だった。抑えつ



けられてきたものが爆発すると、それをきっかけに彼らのなかで眠っていた野性が一気に目を覚ます。一度火がついてしまえば、彼らは行きつくところまで行くしかない。

この時、慶喜は風邪で寝込んでいたが、事情を伝え聞き、開戦に難色を示した。

おそらく彼の体内にも先祖から受け継いだ野性の種が眠っていたはずだが、同時に彼のなかには母方から受け継いだ皇室に繋がる、高貴な「紫の血」も流れていた。それゆえか彼の体温はきわめて低く、野性の種は一向に芽吹く気配がない。慶喜は頭から布団をかぶり、激情にかられる家臣たちを冷やかに眺めていた。

寝巻のまま着替えようとしない慶喜を置き去りにして幕府軍は動き出す。これにより新政権側は討幕の口実を得たが、幕府軍一万五千余りに対して新政権側の兵力は三分の一程度、圧倒的に幕府軍のほうが有利であった。

両軍激突の事態に、いよいよ「日本一強い部隊」都城隊にも出番が巡ってくる。

肥田景之の証言を通して、彼らの奮戦ぶりを眺めてゆこう。肥田はこの時まだ十七歳、都城隊には応募者が殺到したため一家から一人しか参加できないことになっていたが、彼は関係者を拝み倒して兄とともに上京する。運命の日、肥田は仲間十名とともに岩倉具視の護衛を担当していた。彼らは参内する岩倉のお供で御所へ向かい、紫宸殿しんてん御常御所の側まで同行したという。

その後、宮門傍で岩倉の帰りをじっと待っている彼らに、「幕府軍起つ」との情報が伝わったが、なにせ任務中なので動けない。夜になって岩倉とともに御所をさがり、彼らにあてがわれた

岩倉家内の長屋の二階にいと、そこから薩摩藩士たちが鳥羽・伏見へ繰り出してゆく様子が見えた。若者たちはいても立ってもいられない。

「こんなところで悠長にお公家様の警護をしている場合ではない」

「今すぐ出陣だ！」

騒ぎ立てる一同をなだめすかし、交代要員が来るまで待つてくれと、肥田は押しとどめた。翌朝六時半に交代要員が顔をのぞかせると、彼らは直ちに薩摩藩本営の置かれていた東寺まで駆け付けたが、すでに本隊は出陣した後だった。肥田らは本隊を追って走り出した。

一月三日午後五時、鳥羽方面で銃撃戦が始まった。

大目付・瀧川具知が鳥羽街道を北上し入京しようとしたところ、薩摩軍との間で押し問答となり、強引に通過しようとした瀧川に対して薩摩側が発砲する形で戦闘状態に入った。両者の間で激しい撃ち合いとなったが、日が暮れて周囲が暗くなったことからひとまず戦いは終わった。

初陣ういじんを飾る絶好の機会にもかかわらず、肥田兄弟は竹田街道周辺の警備に回されたため、戦端が開いたのを知らずにいた。彼らが本隊に戻ると、すでに敵の姿はなかった。

しきりと悔しがる肥田の兄に、友人の野津鎮雄が声をかけてきた。

野津は後に陸軍中將となり、弟の道貫は陸軍元帥となる。野津はにこやかに肩を抱くと、

「そこら辺に、敵の死骸が累々としておる。外に分捕ぶんちりの大小銃もたくさんあるから見てみるよ」

と、やや自慢げに戦況をこまごまと教えてくれた。

このような話を聞くと薩摩武士としては、自分も是非ひと働きせねばと思ってしまう。丁度そ

の時、暗闇の彼方から銃声が響く。肥田兄弟は反射的に音の聞こえた方向へと走りだした。周囲は暗闇、若者たちは前後に注意を払いながら道を進んだ。

（途中軍装している、二十三十の者にしばしば出会いましたけれども、皆味方と心得、敵とは気付かなかつた、その時の合印あひびは白木綿で襷たすきを掛けた、ところが敵も同様の襷、同様の印しをしておつたために私等は虎口を逃れた）〔史談会速記録〕第二百八十輯〕

敵味方双方が同じ印をつけていたので、おたがいに相手のことを味方だと思つていたとは笑い話だが、この肥田兄弟一行は若者ばかり十五人ほど、怖いもの知らずの大冒険はまだまだ続く。

竹田街道沿いの町に入ると、右の方に兵士が整列していた。彼らはまたしても味方だと思ひ悠然と歩いていると、突如後ろから銃撃を受けた。敵だった。彼らは慌てて反撃を試みる。どうやら敵は大勢のようだ。彼らは適当にパラパラと撃ちかけ、追手がこないのを幸いに一目散にその場を逃げだした。

やっとの思いで伏見の薩摩藩邸につくと、屋敷から火の手が上がっていた。

鳥羽方面と時を同じくして、伏見でも銃撃戦が繰り広げられ、火災により町の南部は焼き払われたという。

「お前ら、どうしてここに来た」

ふいに、物陰から薩摩藩士が顔をのぞかせた。そこで彼らが得意げに大冒険の経緯を説明すると、

「それはいかん、実に危険だ。そこいらに賊軍がうようよおるぞ」

と諫められた。事情が分かると急に怖くなる。同じ道でも帰りは恐る恐る進むため、相当な時間がかかってしまった。彼らが本営に帰ったのは未明すぎ、そっと足をしのばせて体を横たえた。

一月四日、仁和寺宮嘉彰親王が征討大將軍に就任し、天皇から錦旗、節刀を賜った。

その足で仁和寺宮は錦旗を翻し、東寺へと入る。錦旗の出現に薩長陣営は奮い立ち、日和見を決め込んでいた藩は選択を迫られることになった。

まず伏見の淀藩がよろめいた。

淀藩はびたりと城門を閉ざし、幕府軍を入城させなかった。淀藩は譜代の大家家で、藩主は時の老中・稲葉正邦、いわば現職閣僚である。殿様は江戸にいて留守中で、重臣たちが入城を拒んだとはいえ、幕府側の受けた衝撃は計り知れない。ここから裏切りの連鎖が始まった。

ところで、これほど皆が崇める錦旗だが、実は宮中に伝わる伝統的な品でも何でもない。

錦旗は岩倉具視と大久保利通が相談のうえ、国学者の玉松操が大江匡房『皇旗考』をもとに作図し、大久保の妾のおゆうが京都で買った生地を、長州藩の品川弥二郎が萩へ持ち帰り、地元の有職師に縫わせたという代物である。品川はのちにドイツ公使や内務大臣、枢密顧問官などを歴任する人物だ。

秘密裏に作られたという割には多くの人の手を経ており、どこか文化祭の展示物でも作るような楽しい雰囲気さえ感じられる。このような代物が、官軍か賊軍かを見分けるリトマス試験紙の役目を果たしてしまうのだから不思議なからくりとしかいいようがない。岩倉、大久保、品川

トリオは、プロパガンダの魔術師だった。

錦旗の威力は絶大で、幕府側の士気は日を追うごとに低下した。

兵力でまさる幕府軍が味方の裏切りにより敗走する――。

この構図はどこかで見た。そう、関ヶ原の戦いの構図とすこぶる似ているのだ。

鳥羽・伏見の戦いと関ヶ原の戦いは、一枚の写真のネガとポジのような関係で、東軍（徳川）と西軍（島津・毛利）の攻守が入れ替わっているのがミソだ。相手側の裏切りを誘発してもぎとった徳川の天下が、自らの譜代の臣の裏切りにより失われようとしていた。

錦旗のもと、都城隊も奮戦中。

戦いの二日目、肥田少年らはこの日も朝から右往左往する。

まず伏見の方へ向かったが御所の方から砲撃が聞こえ、すわ一大事とばかりに走りだすも、官軍が潜伏中の幕府軍を攻撃したものと分かり、今度は下鳥羽へと西へ急ぐ。

下鳥羽から、その南の淀にかけては砲撃が激しいのだが、竹が茂っていて敵味方の区別がつかない。兄の言いつけで肥田が周囲を探索していたところ、竹藪から歌声が聞こえ、ふとそちらを見ると名前を呼ばれた。薩摩藩の高島鞆之助（とものかすけ）である。高島はのちに陸軍軍人となり、陸軍大臣、枢密顧問官などを歴任する。

高島に誘われ、ともに戦おうとすると、頃合いを見計らったかのように長州藩の山田顕義隊（あきよし）が現われた。山田は法典編纂に尽力し、のちに司法大臣を務める。山田隊は太鼓を打ち鳴らし軍歌

を歌いながら敵中へ飛び込んでゆく。だが意気込みほどには強くなかったようで、肥田らは慌てて加勢をしている。のちに衆議院議員となる肥田のネットワークは、この戦時下で作られたものだともいえる。

戦争の三日目、彼らは朝から疲れていた。

前夜は敵と対峙したまま、竹林に野営を張った。冬山の寒さはたとえようもなく、さすがの都城隊も霜に苦しめられ、寝不足のうちに朝を迎えた。日が昇り凍りついた手足が温まると、彼らは淀堤まで進軍する。

すでにそこは激戦場で、多くの負傷者が出ていた。

血のにおい、うめき声、砲撃の音。前夜の疲れはたちまち吹っ飛び、彼らのなかの野性が騒ぎ出す。肥田兄弟ら二十人ばかりの若者は、他の隊を押しつけ薩長軍の先頭に出た。

ところが、堤の下には九十ばかりの伏兵が彼らを待ち構えていた。たちまち、敵も味方も分からないまま大乱闘が始まった。咄嗟とつさのことで、肥田は敵と対峙したまま、斬ることも突くこともできない。彼らの頭の上を弾丸が飛び交う。

ふと気がつく、肥田の頭から血が激しく噴き出している。傷口を手拭いで押さえていると、仲間が駆けつけ両側から助け起こしてくれたが、そこから先の記憶が途絶え……。

我に返ると、そこは病院だった。

彼は病床で兄が亡くなったことを知らされた。肥田の兄は部下の負傷者を避難させようと肩を貸したところを、敵から狙撃を受け耳をやられたという。それでも彼は前線に復帰し、今度は真

正面から二発の弾丸を受け亡くなった。こよなく兄を尊敬していた肥田は悲しいというよりも、ただ呆然とした。思わず目を閉じると頭が割れるように痛い。

肥田少年は生まれてはじめて戦争というものの本質に触れた気がしていた。

一月六日夜、慶喜は大坂城に幕府軍諸隊の主だった者を集めた。

戦いが始まってからこの日まで、彼は風邪と称して大坂城を一步も出ない。大広間に集まった人々は口々に戦いの続行を叫び、慶喜自身の出馬をしきりと願った。

その声に押されるように、ついに慶喜が口を開く。

「されば、これより出立すべし。一同、用意をせよ」

先頭に立つて自ら戦う意思を示した慶喜の言葉に、広間は歓喜に包まれた。おたがいに決死の覚悟で戦い抜こうと誓いあい、急ピッチで出陣の準備が始まった。ところが、である。

（予はその隙に伊賀・肥後・越中（松平定敬）らわずかに四、五人をしたがえて、ひそかに大坂城の後門より脱け出でたり。城門にては衛兵の咎むることもやといたく氣遣いたれど、御小姓なりと詐りたるに欺かれて、別に恠しみもせざりは誠に僥倖なりき）（『昔夢会筆記』）

七日午前二時、なんと慶喜は配下の者を見捨て、数人の供を従え、小姓に化けて城を抜け出したのである。

というのも、慶喜は錦旗と戦いたくなかったのだ。

慶喜の皇室に対する強い想い入れは、生家水戸徳川家の独特な教育により育まれた。慶喜が二

十歳の時のこと、父の徳川斉昭は彼を手元へ招いて諭した。

（おおよけに言い出だすべきことにはあらねども、御身おんみももはや二十歳なれば心得のために内々うちうち申し聞かするなり。我等は三家・三卿さんけいの一として、幕府を輔翼ほよくすべきは今さら言うにも及ばざることながら、もし一朝事いちぢうじ起りて、朝廷と幕府と弓矢に及ばるるがごときことあらんか、我等はたとえ幕府には反もとくとも、朝廷に向かいて弓引くことあるべからず。これは義公ぎこう（水戸光圀卿）以来の家訓なり。ゆめゆめ忘るることなかれ）（同上）

たとえそれが幕政に逆らうことになるうとも、我ら水戸徳川家が朝廷に向かつて刃向かうことがあつてはならない——この言葉は、明治四十年に慶喜が述べた事柄ゆえに、天皇家への崇敬の念をことさらに言い立てている点を差し引いて考えなければならぬが、同家が尊王思想の強い御家柄であつたことは事実のようだ。

水戸光圀は「水戸黄門」の名前でテレビドラマなどでもおなじみの人物であるが、彼が後世に遺した仕事として最も大きなものは『大日本史』という歴史書の編纂である。

『大日本史』は神武天皇から後小松天皇までの時代を、中国の儒教的な歴史観に当てはめて記述し、明暦三（一六五七）年に編纂が開始され最終的にでき上がったのは明治二十九（一九〇六）年という、息の長いというか長すぎる事業だ。そのため途中で、でき上がった部分のみ出版され、これが大きな評判を呼ぶ。

『大日本史』は淡々と歴史を記述するのではなく、儒教的な名分論に基づき政権の正閏せいじゆん（正統か否か）や人物評価を下すのが特徴だ。「君は君、臣は臣」と、君臣関係を突き詰めてゆくと、日



本の国家秩序は天皇を頂点とし、徳川家はその臣下となる。

関ヶ原の戦いを思い返していただきたい。徳川家康は天皇家から天下をお預かりしたわけではなく、豊臣家から武力で奪い取ったのだ。それを儒教的な解釈で正当化しようというのが、水戸光圀の『大日本史』編纂の当初の意図するところであったはずが、長い年月のあいだにどんどんと理論が変化していった。

『大日本史』の編纂過程で発展した思想を水戸学という。

水戸学は前期と後期に分かれ、ことに後期の水戸学は全国の志士たちに多大な影響を与えた。

薩摩藩の西郷隆盛らが私淑した藤田東湖も、長州藩の吉田松陰が教えを請うた会沢正志斎あいざわせいしさいも、ともに水戸藩に仕え、斉昭のブレンであった人々だ。吉田松陰の門下生には、高杉晋作、久坂玄瑞くさかげんずい、伊藤博文、山縣有朋など長州藩出身の人材が名を連ねている。

斉昭が真顔で息子に、（我等はたとえ幕府には反くとも、朝廷に向かいて弓引くことあるべからず）と語る陰には、彼らの薫陶があった。

幕末に志士たちの間に広まった尊王論は、もとはといえば水戸藩の学者たちが紡ぎ出したものである。だが、それが巡り巡って錦旗が翻ただけで並みいる大名家が次々と恐れ入ってしまう事態となり、水戸藩出身の將軍・慶喜の首を絞めるとは、これほど見事な皮肉もないだろう。

そのうえ將軍自身が母方の血を誇り、理念的に天皇家を崇めた志士たち以上に、天皇家への生理的な尊敬を抱いているのだから、自らの首に絡んだ糸をほどくすべもない。

七日朝、將軍が姿を消したことに気がついた幕臣たちは啞然とした。

大將が部下を置いて敵前逃亡するなど聞いたこともない話だ。武士道以前の問題である。あきれ果てたのはイギリス人も同様だった。

（大君が大坂から逃亡したやり方は感心できない。大君自身にも、その側近にも、勇氣というものがほとんど感じられない）（パークスよりハモンド外務次官への半公信、一八六八年二月十五日付）（『遠い崖』六）

（これは日本人の目から見ても、ヨーロッパ人の目から見ても、またいかなる点から見ても、不面目な次第であった）（『外交官の見た明治維新』）

サトウは大坂城の状況を視察している。

（城の前はたいへんな群衆で埋まり、門を守る番兵の姿は見えなかった。奉行の役宅の門を叩いてみたが、返事はなかった。あきらかに逃亡してしまったのである。群衆は声をあげて笑った）（『遠い崖』六）

江戸幕府は將軍という核、まさに中心の中心から崩壊した。社会の底辺から噴き出したマグマは、国家の新たな形を求めて大地の上をのたうっていた。

慶喜の「敵前逃亡」から四ヶ月を経た五月末、都城隊に奥羽遠征の援軍として出軍命令が下った。

本営から遠征支度として毛布一枚と、目印の腕章として「幅二寸、長さ五寸」の錦切が配布さ

れた。錦切は錦旗にちなんだ品ということなので、一同は太陽の破片でも受け取るかのように、両手でありがたく拝受した。

この時、肥田景之は赤痢に苦しんでいた。

（まだ若年ではあり病院に入るとは潔しとせぬので、入院して治療をしろと申されましたけれども、やはり従軍しておりました。しかし困るのは船中で便通の場合など、誠に困難でした。それで始終甲板の便所の側に寝転んでおったのであります）（『史談会速記録』第二百八十輯）

これでは船内に赤痢が蔓延してしまふ。よくもこれほどは迷惑な話が許されたものだが、たとえ十七、八の若造でも武士が意地を示せば、まかり通つてしまふのが薩摩藩である。

穏やかな波に揺られる旅の無聊を慰めるため、楽士たちが楽器に手を伸ばす。

新政府軍の間では、「トコトンヤレ節」という歌が流行していた。この歌は錦旗の製作に携わった品川弥二郎の作と伝えられている。

（宮さま宮さま御馬の前のびらびらするのはなんじやいな、トコトンヤレトシヤレナ

ありや朝敵征伐せよとの錦の御旗じゃ知らないか、トコトンヤレトシヤレナ

伏見・鳥羽・淀・橋本・葛葉の戦いは、トコトンヤレトシヤレナ

薩長土しのおほ（合う）たる手際じゃないかいな、トコトンヤレトシヤレナ

音に聞こえし関東土どつちやへ逃げたと問うたれば、トコトンヤレトシヤレナ

城も気概も捨てて東へ逃げたげな、トコトンヤレトシヤレナ（『戊辰戦争』）

蒸気船・三邦丸は日本一強い部隊を乗せ、大海原を滑るように前進する。手拍子、かなり声、ラツパ、太鼓などさまざまな形の音符が潮風に舞い上がった。

島津家の戦争 米窪明美著

発行・集英社インターナショナル 発売・集英社  
定価 1,700 円（本体）＋税  
ISBN 978-4-7976-7208-4

ウェブでのご予約は [こちらにどうぞ!](#)